

この手にて紡がれし 対馬の歴史

対馬市初の名誉市民

ながどめ ひさえ
永留 久恵さん

永留久恵さん（93歳）

1920年（大正9年）上県町志多留生まれ。
長崎師範学校卒業後、海軍兵として真珠湾攻撃・ミッドウェー海戦を経験。復員後は、教職の傍ら、対馬の歴史研究に尽力。昭和39年に発刊された「新対馬島誌」の編集や島内すべての町村誌の編集や執筆に関わる。

雞知中学校長を最後に55歳で退職し、長崎県立対馬歴史民俗資料館の建設準備委員に。完成後は初代研究員として12年間勤務。

平成2年には「芳洲会」を結成し、日韓友好と学術・文化交流をすすめる。平成21年に発刊された歴史書「対馬国志」は日本自費出版文化賞大賞に輝く。

名実ともに対馬を代表する郷土史家。
巖原町日吉在住。

主な著書

「古代史の鍵・対馬」

（大和書房・昭和50年）

「海神と天神」

（白水社・昭和63年）

「雨森芳洲」

（西日本新聞社・平成11年）

「対馬国志」

（対馬国志刊行委員会・平成21年）

「太平洋戦争の追憶」

（交隣社出版企画・平成24年）

など多数

とにかく歴史が 好きだった

お年寄りから昔の話聞くのが楽しくて、歴史の教科書もすぐに読み終わり、子どもながらに日本中、世界中を見てみたいと思っていたものです。

他のことでは負けても歴史のことだけは負けたくなかった。東郷平八郎など戦争ものに興味がありましたね。

その後自ら出征する日が来て「草むす屍」となるより、「水漬く屍」となることを選び、真珠湾攻撃やミッドウェー海戦に参戦しました。

しかし戦争に敗れ、このままミッドウェーに沈むべきかと悩んだ時に、私の目を覚ませたのが、乗りこんでいた空母飛龍の艦長の一言でした。『お前たちはここで終わってはいけない。もう一度お国の役に立ちなさい』と。この言葉が今の私の原点となり、「生きる誇り」を持たせてくださった艦長の遺命に応えることこそが、自らの哲学であると思いつけてきました。

今思えば、伝染病にかかるも命拾いし、戦争で生き残り、癌を克服し、と私は本当に運がよかった。復員後、社会科の教師になりました。外国と対馬の繋がりがなんか話すと生徒たちは喜んでますよ。教えずと酒を酌み交わすと「先生はいつも教科書を持っていませんでしたよね」と冷やかされたりして。

教員時代の退職金はすべて研究に費やし、韓国や中国にもよく行きました。亡くなった家内には迷惑かけましたね。感謝しています。



雨森芳洲

私の“対馬学”

対馬を軸に、東アジアの中で対馬がどのような役割を果たしてきたのかということ。対馬のことを対馬の中だけで見るのではなく、一つの歴史がどこ、どのように繋がっているのかに惹かれます。

そして考古学や民俗学など、他の学問をふくめた歴史を主としています。日本列島は最初から人が住んでいたわけではありません。中国や韓半島、東南アジアなどほぼほぼうから来たものが寄り集まったのです。そして、その多くは、対馬を通じて来たと思えば興味が湧きます。外国との交流こそが対馬らしさと言えるのではないのでしょうか。

私が一番に影響を受けた歴史上の人物は、何といても対馬藩で外交を行った江戸時代の儒学者「雨森芳洲」です。彼は日本語、韓国語、中国語を操り偏見のない交隣外交に務めました。対馬にとっ

てやはり交流の一番はお隣の国、韓国です。しかし、仲良くできる人もいればそうでない人もいます。そういう中でどんな付き合いがよいのか、と考えたのが「芳洲会」の立ち上げに繋がります。芳洲が説いた「誠信交隣」の精神を継承していこうと仲間と活動してきました。

長崎県の主催で「芳洲外交塾」も開くことができました。私の歴史観として朝鮮通信使が往来していた260年間、日本は一度も戦争をしていません。その後国交が断絶してから、戦争に明け暮れる日が続くことになったのです。

隣国と仲良くしなければ我が国は成り立っていない、ということをお腹にすえるのも大事なことでないのでしょうか。

西泊の話を司馬さんに 伝えたかった：

有名な「街道をゆく」の取材でお会いした時、私のことを「先生」とおっしゃったのにびっくりしました。私が研究者だと知ってくれていたのだと。取材に同行し、巖原から上県佐須奈までを案内しました。司馬さんが対馬を一日で回りたと言ったことに、私は「無理です」と言いました。

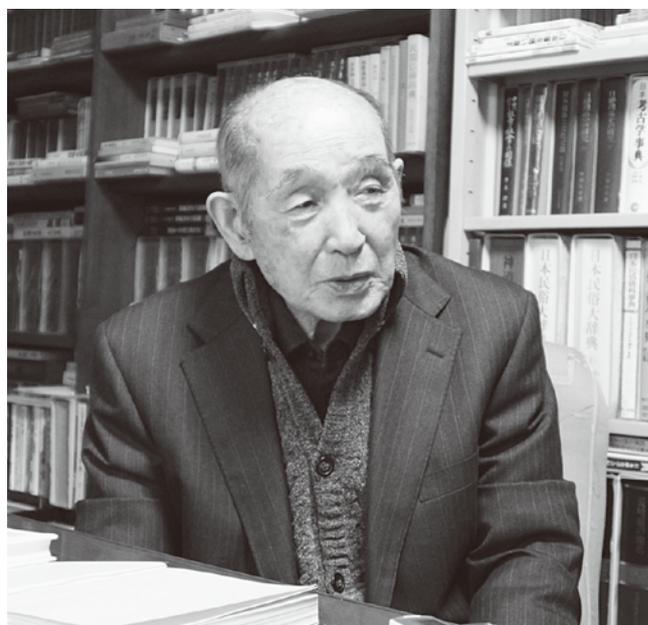
本を読んだある方に「司馬さんは香岐のことは誉めているが、対馬のことは永留先生のことしか誉めとらん」と言われたことがあります。というのは、対馬の棧橋に上陸したときのタクシー運転手の対応や、対馬の人が荒っぽいとかいう下りのことなんです。

あの日を振り返って特に残念に思うのは、明治時代の日本海海戦の折、対馬沖で全滅したロシア艦隊の兵がボートで上対馬の殿崎にたどり着いたとき、西泊の人たちがお客さんのように手厚くもてなしたあのエピソードを司馬さんに伝えることが出来なかったことです。

せめて、もう一日対馬に居てほしかった…。



街道をゆく13 香岐・対馬の道
(朝日新聞出版)



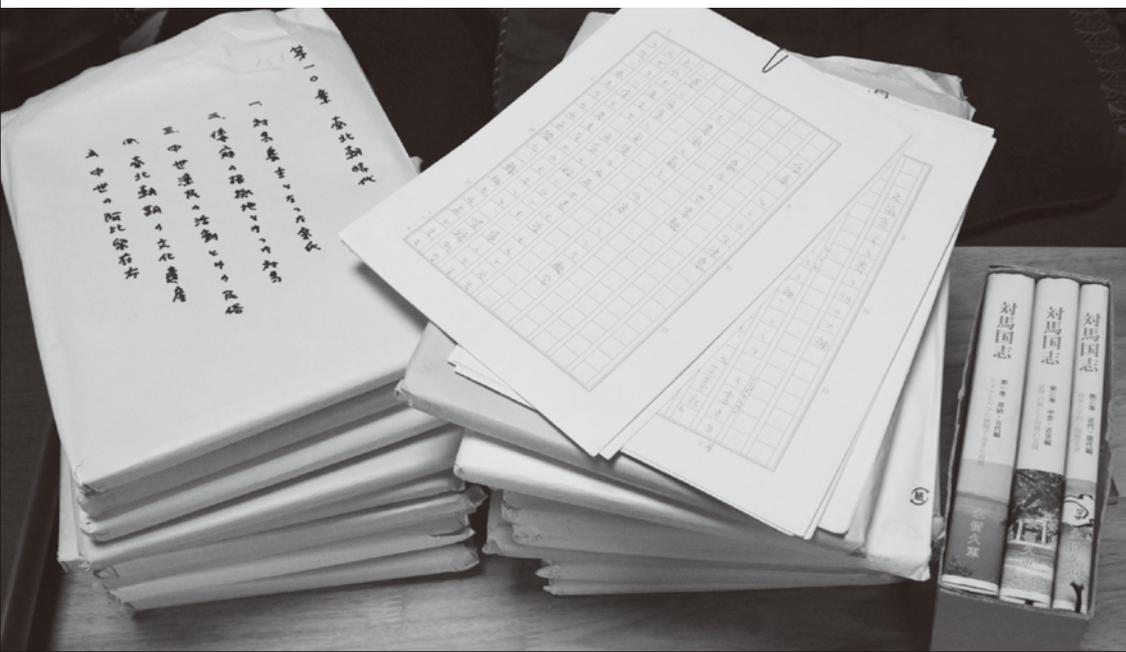
対馬には対馬なりの 幸せな道がある

昔、長崎の先輩が「こちらに出てこい」と言ってくれたことがあります。でも私は「ここに住み着いたからには、私は対馬のことを勉強しなければならぬから」と断りました。大正から生き続け、いろんな時代を見て来たから、雨森芳洲が膨大な資料を残してきたように、私も記録を書き残したいと思えました。特に「対馬国志」は何十年も書き溜めてきたもので私の哲学を要約しています。

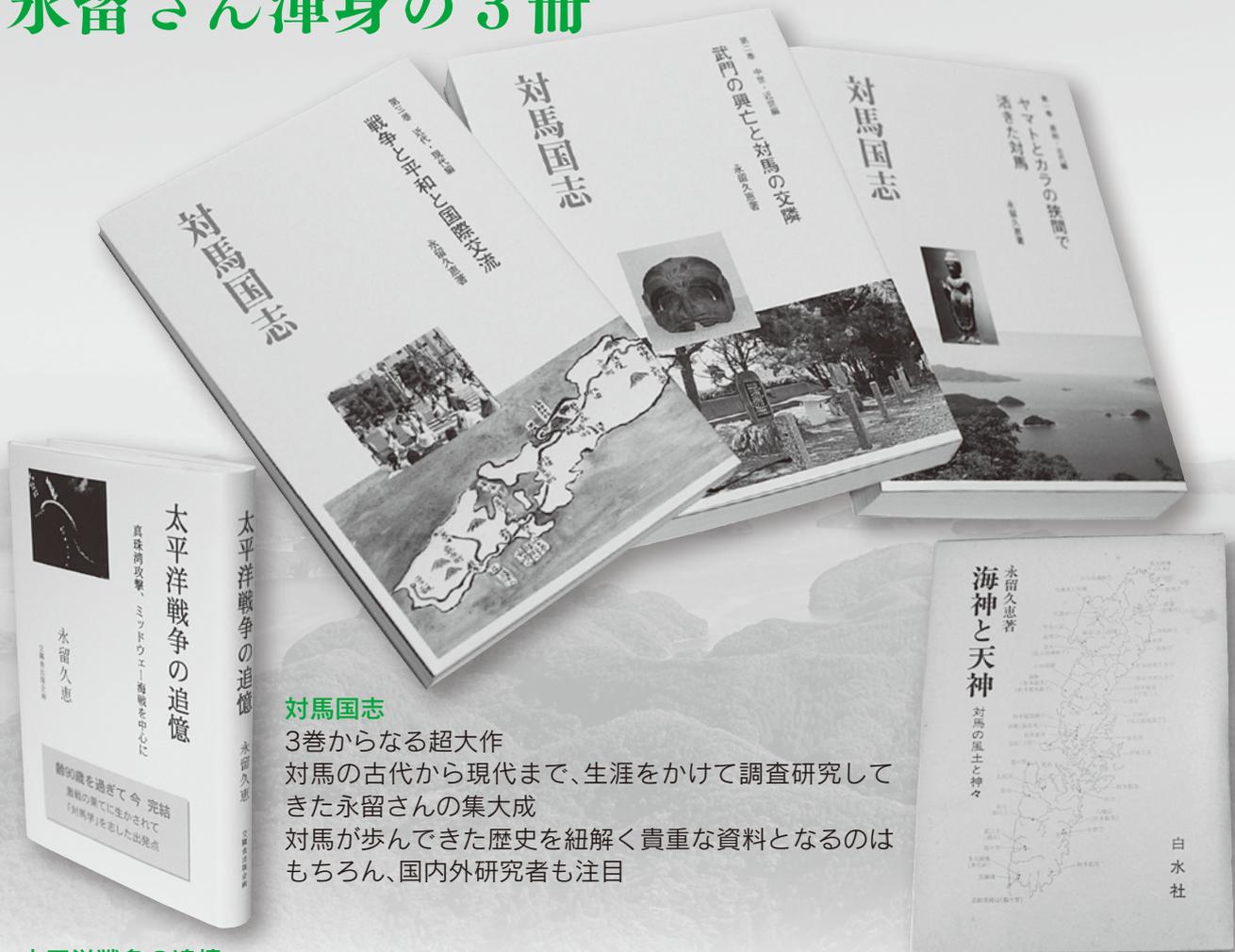
私が子どもの頃、対馬の人口は5万人、戦後7万人にまで増えました。ところが高度成長で多くの二男・三男は対馬を離れました。今の対馬は出ていく

1,000ページに及ぶ「対馬国志」の原稿はすべて手書き
膨大な量の原稿を、息子の史彦さんがすべてパソコンに入力

ばかりでさびれています。これを食い留めるには新たな産業を興すしかありません。対馬には対馬なりの幸せな道があると思うのです。
対馬にとって交易は無くしてはならないものです。国内外からもっとお客さんが来てくれるようになれば…。対馬の歴史から学ぶこともあると信じています。



永留さん渾身の3冊



対馬国志

3巻からなる超大作
 対馬の古代から現代まで、生涯をかけて調査研究してきた永留さんの集大成
 対馬が歩んできた歴史を紐解く貴重な資料となるのはもちろん、国内外研究者も注目

太平洋戦争の追憶

自身の戦争体験を振り返った回顧録

海神と天神

海神と天神

対馬神道研究の決定版と言われる一冊

永留 久恵先生の対馬名誉市民称号受賞に寄せて

永留久恵先生の名誉市民称号の受賞、誠におめでとうございます。市民の皆様と共に心からお喜びを申し上げたいと思います。

ご承知の様に、永留先生は教員を退職後、今日まで対馬の主な遺跡や文化財、民俗の調査研究をされながら数々の著作を発表し、西日本文化賞をはじめ多くの賞を受賞されています。また国内との文化学術交流はもとより、韓国との文化交流の基礎も築かれてこられました。



対馬芳洲会
 会長 松原 一征



日本自費出版文化賞表彰式にて

対馬にあつて、対馬の為に、対馬を国内外に広く知らしめ

たご功績は、実に偉大なものがあります。まさに、対馬の人間文化財であり、対馬市民の等しく誇りとするところであります。

93歳になられた今も、執筆の情熱いまだ冷めやらず、日夜机に向かわれておられます。

どうか、くれぐれも健康に留意され、いつまでも私どもをお見守り頂きますよう祈念してやみません。